

## 第4章 備前市の歴史文化の特徴

備前市は南北に大きく広がっており、市域の大部分は山林が占める一方、市域の南側は瀬戸内海に面し海運に恵まれた地域となっています。豊かな山林資源、水運に恵まれた立地により、古代から窯業が営まれ中世には伊部地区を中心に数多くの窯が築かれた備前焼は、その伝統技術が多数の窯元や作家によって受け継がれています。また、人口が希薄で自然豊かな環境を、近世以降的確に把握し利用した池田家により、国宝の旧閑谷学校講堂や、国指定史跡の岡山藩主池田家墓所をはじめとした建造物が造られ、文化資源として現在まで伝わっています。近代以降は、耐火煉瓦をはじめとした製造業が発展したほか、自然環境にも恵まれ、山や海で採れた産物を活かした食文化が形成されてきました。

こうした背景から、以下の5つが備前市の歴史文化の特徴として整理できます。

### (1) 山や川、海、平野などの地勢から交通・流通の拠点となった地域

備前市は岡山県の南東に位置し、兵庫県と隣接しています。市域の北部である吉永地区は、東は兵庫県佐用町・赤穂郡上郡町、北は美作市に接する南北に長い地域です。市域の南東部である日生地区は、東は兵庫県赤穂市、南は瀬戸内海に面しています。また、市域の西部は和気町・赤磐市・岡山市・瀬戸内市に接しています。瀬戸内海には鹿久居島・頭島・大多府島・鶴島・鴻島等からなる日生諸島が展開しています。その地勢から岡山県東部の備前焼の生産・柵原の鉄鉾石や耐火煉瓦の集散の拠点ともいえる地域として発展してきました。

内陸に入り込む片上湾は、後氷期の海面上昇によって谷が沈水したことで形成されたおぼれ谷の地形で、天然の良港として利用されてきました。湾の最奥部には縄文時代に人々が定住し、長縄手遺跡が形成され、古代には美作国の津となります。また、15世紀中頃の文献「兵庫北関入船納帳」<sup>ひょうごきたせきいりふねのうちょう</sup>の記述からは、片上・伊部などから備前焼の壺などが積み出されていたことがうかがえます。日生の島嶼部には中世瀬戸内海の交易品の流通拠点のひとつと考えられる千軒遺跡が形成されました。

一方、低丘陵が展開する岡山県南ですが、備前市では標高が400mを超える熊山をはじめ急峻な山塊が連なります。その熊山には中世に霊山寺を中心に宗教的な拠点ができ、山々では戦国武将が覇権を争う三石城や富田松山城などが構築されます。八塔寺においても「西の高野山」とも呼ばれるぐらいの真言密教としての勢力が形成されます。平野部に急峻な山塊を縫うように作られた山陽道は、鎌倉時代の終わり頃、三石～和気を通る北路から三

石～片上～長船の南路に変わります。「一遍上人いっぺんしょうにんえでん絵伝」にも福岡の市の賑わいが描かれています。近世の山陽道沿いには醸造業やお歯黒生産で栄えた香登があります。近代以降では、柵原の硫化鉄鉱石の積出ルート片上鉄道と片上港が流通の拠点となります。

## (2) 備前焼を礎に発展してきた産業構造をもつ地域

備前市南西部の東鶴山地区(佐山)は、中国地方最大の須恵器窯跡群である邑久古窯跡群の北東端に位置します。佐山周辺の地域では 7 世紀末頃には須恵器の生産が開始され、9 世紀には佐山全域で窯が築かれます。12 世紀後半には生産の地が伊部へと移り、やがて備前焼の生産が開始されたと考えられています。鎌倉時代に描かれた「一遍上人絵伝」には、福岡の市で備前焼の壺や甕が取引される様子が描かれています。また中世後半以降、備前焼は機能性の高い商品として西日本を中心に流通し、織豊期にはその味わいから為政者に茶道具として取り上げられました。近世以降は他の窯業地で生産された施釉陶や磁器に商品としての市場を奪われ、細工物や土管、徳利などの商品に活路を見出しますが、明治期には衰退の道を辿ります。昭和に現れた「備前焼中興の祖」金重陶陽によって、美術品としてその市場価値を見出され、今日まで至ります。

一方、備前焼土管などの生産技術は、三石地区で産出するろう石が耐火煉瓦の原料となることから耐火煉瓦産業へと応用され発展し、現代でも備前市の基幹産業となっています。

## (3) 恵まれた海から生み出される海産物を生かした食文化が育まれた地域

備前市は市域面積の約 80%を山地が占める自然に恵まれた地域です。また瀬戸内海に面しているために海の幸にも恵まれています。それらの恵まれた自然から生み出される産物を活かし、豊かな食文化が育まれてきました。その代表格がカキオコ(カキ入りお好み焼き)です。昭和 36(1961)年にカキ養殖が日生地区で始まったことがきっかけとされ、今では日生地区のソウルフードとして全国に向けて強力な情報発信力を持っています。全国でもカキ養殖の有数の産地となった日生地区ですが、江戸時代にはサワラ漁の船が 300 隻、各地へ出漁し、大坂魚市場では「魚島のサワラ」として高値で取引され、その漁民が 150 年前に生み出した「つぼ網漁法」は日本だけでなく韓国の近代漁法に影響を及ぼしました。春のサワラは、豊漁・漁業の安全を願い作り始めたこうこ寿し、漁師めしが家庭料理になったいりやき、内臓の塩漬けを使ったわたがいやきも郷土料理としてよく知られています。このほかにもケッケ(ダイチョウ)、イイダコ、このわた、アナゴなどの海の幸は郷土色豊かな食材として季節に合わせて食されます。イチジク、ピオーネ、マスカット、モモ、ソ

バナなどの山の幸にも恵まれ、食材だけでなく加工産品としても販売されています。

#### (4) 映画のロケ地にもなり多数の文学者を輩出している地域

備前市出身の文学者は、自然主義文学に新境地を開拓した穂浪出身の正宗白鳥<sup>まさむねはくちょう</sup>、「罪な女」「秋津温泉」など数多くの小説を執筆し、エンターテインメント作家としても活躍し直木賞も受賞した片上ゆかりの作家藤原審爾<sup>ふじわらしんじ</sup>や「眠狂四郎」シリーズでも知られ文化人タレントとしても活躍した鶴海出身の直木賞作家柴田錬三郎<sup>しばたれんざぶろう</sup>が代表格となります。さらに近年再評価が進むプロレタリア文学者の寒河出身の里村欣三<sup>さとむらきんぞう</sup>、伊部出身の小説家・詩人で「エンキョリレンアイ」などの恋愛小説が話題を呼んだ小手毬<sup>こてまり</sup>るい、吉永出身で昭和50年代の日本のサブカルチャーをけん引した編集者で「素敵なダイナマイトスキャンダル」の著作もある末井昭<sup>すえいあきら</sup>も挙げられます。このほか、芸能、政治・経済、音楽の分野でも世界的に活躍し、地域に貢献した多くの方々がありますが、備前市出身の文学者数は他の分野に比べて顕著となっています。小津安二郎監督「早春」<sup>おつやすじろう</sup>の映画のロケ地として三石が舞台となったのをはじめに、八塔寺ふるさと村<sup>いむらしょうへい</sup>も今村昌平監督「黒い雨」、市川崑監督「八つ墓村」<sup>いちかわこん</sup>などのロケ地としてたびたび取り上げられます。この背景は自然が豊かであったり、特徴的な景観を持つ場所が備前市に多くあったりすることに起因します。文学者を多く輩出していることは個人の才能的側面としてとらえることができますが、こうした印象的な景観が文学者のその後の文学観に影響を与えた可能性もあります。

備前市内には、こうした文学者の生家跡等に記念碑が多く建てられています。

#### (5) 社会で生きる基本能力を身に着け、地域のまとめ役を育てるといふ学びの伝統が現代まで受け継がれている地域

閑谷学校は、寛文10(1670)年に設立された世界最古の庶民のための公立学校と言われており、岡山藩主池田光政が、村や地域の運営にあたる村や地域のリーダーたちを養成する目的で設置しました。

岡山藩士の津田永忠により整備が進められ、学房が寛文12(1672)年に、講堂が延宝元(1673)年に、聖廟が延宝2(1674)年に建造され、光政の死後には学校の恒久化を目指して校内建物の改築を行いました。現在の閑谷学校の規模は18世紀初頭に揃いました。

教育内容は基礎的な手習い・算用・素読から儒学の講釈まで幅広く、階層を超えて人々の共通の教養を広める役割を担いました。武士や他地域の子弟も受け入れ、学校の教育や運営に庶民出身者を登用するなど、開かれた学校でした。

閑谷学校の空間構成の特徴として、まず山あいの閑静な場所に立地する点が挙げられます。藩校等は藩の政治経済の中心地である城下に建てられる場合が多く、建物や周辺環境が失われやすいのですが、閑谷学校は学校名から連想する印象がその立地と合致し、今も建物は良好に保存されています。この場所が選定された理由は、光政が「山水清閑、宜しく読書講学すべき地」と教育の場に相応しい環境であると判断したことによります。山紫水明の地に身を置くことによって修養を深める思想は、儒学の普遍的な基本思想です。

現在も完成時の遺構と配置がほぼそのまま残っています。学びの場である講堂は現存する日本最古の学校講堂であり、宗教建築に準じた質の高い空間として設計され、堅牢な石塀で囲まれた全体は学びの理想を示しています。単独で立つ講堂の東側には、高台に聖廟と閑谷神社を配し、特に孔子を祀る聖廟は敷地の東側に一段高く立地しています。西は火除山<sup>ひよけやま</sup>によって出火しやすい日常空間（学房群）と儀式空間を隔離しています。光政を祀る芳烈祠<sup>ほうれつし</sup>（現閑谷神社）や光政の爪や髪を納めた椿山<sup>つばきやま</sup>により、庶民教育の場という廃されやすい立場の学校を守る建物配置としています。

閑谷学校は、明治4(1871)年岡山藩の廃止によって閉校となりますが、翌々明治6(1873)年には閑谷精舎として再興され、その後も閑谷巖<sup>しずたにこう</sup>・私立閑谷中学校・岡山県閑谷中学校等と移り変わり、近代以降の教育制度の大幅な改変後も、脈々とその学びの伝統は受け継がれました。